

猫の表象をめぐる日本と韓国の比較文化

PARK, Yukyung / 朴, 庚卿

(出版者 / Publisher)

法政大学大学院 国際日本学インスティテュート専攻委員会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

国際日本学論叢 = Journal of international Japanese-studies / 国際日本学論叢 = Journal of international Japanese-studies

(巻 / Volume)

8

(開始ページ / Start Page)

27

(終了ページ / End Page)

50

(発行年 / Year)

2011-03-22

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007111>

平成二十二年 度 国際日本学論叢第八号 二〇一一年三月二十二日発行 抜刷

猫の表象をめぐる日本と韓国の比較文化

日本文学専攻修士課程二年

朴 庾 卿

猫の表象をめぐる日本と韓国の比較文化

日本文学専攻修士課程二年

朴 庚 卿

はじめに

猫が人間と関係を持ち始めたのは、およそ五千年前、アフリカのリビア地方の山猫をエジプト人が飼い慣らしたことがその始原といわれている。

日本と韓国の場合も、猫は主に鼠から穀物や仏教の経典の破損などを守るために飼い始められ、今日に至った。その長い歴史の中で、日本には、韓国では見られない日本独特の猫の文化を創り出した。たとえば、猫神社や招き猫、さらに、猫を主人公にした文学やアニメーションなどがその例として挙げられる。一方、韓国における猫は、神どころか可愛い動物というよりも、どちらかといえば、憎たらしく恐ろしい存在とされてきた。

このように日韓において、猫に関するイメージの違いは他の動物のそれと比べて明確に現われる。これが、本論の比較対象に猫を選んだ理由である。同じ動物に対するイメージの相違は、それぞれの有する文化や歴史によるところが大きい。本論では、古典文献における猫の表象の変化を辿ってみる。そこに現れた猫の表象とその背景になった文化を考察し、それぞれが意味するものの比較検討を試みる。

一 日本における猫の表象

日本の猫は前述したように、人間に身近な存在として、日本人の生活の中に溶け込み、人に癒しを与える大事な存在とされている。今日では学問の研究対象としても注目を集め、文学雑誌では「猫」特集という特別版も発刊されており、ことに、「化け猫」は妖怪文化研究において注目の対象とされている。このような日本における猫の表象を考察するにあたって、まず、「猫」という字の意味からみてみよう。白川静の『字通』によれば、「猫」という字は「狸」とも書き、「狸（狸）の属なり」とあり、家猫を狸奴と言って不気味さのある獣で、子の日に猫を用いる巫蠱ふこの法があり、猫鬼といった。⁽²⁾そして「ネコ」という読みについては様々な説があるが、『字通』には猫の鳴き声の擬声語であるとされている。白川による「猫」という字からみた猫のイメージはことに猫のもつ魔性が強調されており、近寄りがたい距離感を感じさせるが、実際、猫を飼っていた人々に猫はどう表象されてきたのか。

(一) 気高い猫の登場

猫に関する記録が初めて姿を見せたのは平安前期の仏教説集『日本霊異記』の上巻第三〇話「非理に他のものを奪ひ、悪行を為し、報を受けて奇しき事を示しし縁」である。

藤原の宮で天下を治めになった文武天皇の御代、慶雲二年の秋九月一五日に膳臣^{かしわでののみひろくに}広国は急死し、三日後に生き返る。死んでいた三日間「度南の国」に行かれた広国は亡父に会う。生前の罪の報いで苦しい毎日を生きていた亡父は広国に自分の罪が許されるように現世に戻ると供養することを頼み、次のように語る。⁽³⁾

我飢ゑて、七月七日に大蛇になりて汝が家に到り、^{やど}屋房に入らむとせし時に、杖を以て懸け棄てき。又、五月五日に赤き狗^{いぬ}二成りて汝が家に到り時に、犬を喚び^よ相せて、唯^{ただ}に追ひ打ちしかば、飢ゑ^う熱りて還りき。我正月一日に狸^{こり}に成りて汝が家に入りし時に、供養せし^{しんぐよう}穴種^{あなむね}の物に飽きき。

原文では「狸」と書いてあるが、「猫」「狸」はネコの意にも用いられたという。⁽⁴⁾

広国の父は死去から一年に一回、蛇、犬、猫という動物になって広国の家に現れる。一年目は七月七日七夕に蛇の姿で、二年目は五月五日端午の節句に狗の姿で現れ追い払われるが、三年目は正月に猫の姿で現れ、御馳走になる。ここで注目すべきことは、なぜ猫だけが御馳走になるのかということ、なぜ猫が正月に現れたのかということである。蛇と狗が現れた七夕と端午の節句は供え物があるとしても、それは祖先に供養する物ではない。しかし、猫が

訪れた正月は祖先のための供えた物がある。つまり、祖先が猫として現れる、その当時の人々には「猫を祖先として考える」認識が共有されていたのではないかと考えられる。また、『日本霊異記』が仏教説話集であるという点を考慮に入れると、この説話集全体に流れている仏教思想からの影響を感じさせる。中西裕は『日本霊異記』に登場する「猫」について、「猫という動物には渡来の初期から「仏教の番人」、つまり仏法の守護眷族というイメージがあったのではなからうか」と述べており、さらに『源氏物語』に登場する猫は「因縁」、『更級日記』の「猫」は「転生」という仏教的な観念を表象しており、「中古の文学では、猫と仏教は親しいのである」と論じた。⁵⁾要するに、「猫は祖先」と断定はできないが、おそらく、平安時代という時代的な背景、つまり唐から輸入されたということを何より大事にしたことと、経典を守ってくれる猫という認識、それに関連して仏教思想の影響があったと考えられる。

(二) 王朝ブランド品「唐猫」

気高いイメージで文献に初登場した猫は王朝時代の貴族文化のシンボルの一つであるブランド品として愛される。王朝ブランド品というのは王朝生活を彩る美しい舶来品であり「唐物」といわれることで、当時、猫も「唐猫」と呼ばれ、貴族の富のシンボルとして愛された。⁶⁾

唐猫の記録は『宇多天皇御日記』寛平元（八八九）年二月六日が最初の文献である。平安時代、京では既に早く宮中を中心に、愛玩「動物」として猫が飼育されるようになっていた。宇多天皇の日記には「太宰少弐源精朝秩満来所献於先帝。／……／長尺有五寸高六寸許。／……／亦能捕夜挺於他猫。／……／毎旦給之似乳粥。先帝愛翫數日之後賜之朕⁷⁾」と記録されている。

猫の表象をめぐる日本と韓国の比較文化

宇多天皇の唐猫は、そもそも太宰少貳であつた源精が先帝の奉つたものを数日後に賜つたものである。毎日乳粥を与えて育てたというが、その時代の牛乳は宮中の薬所にある薬で普通の人間もめつたに口にする事ができない高価なもので、その乳粥をやつたことから非常に大事にされたことが分かる。そして、夜に鼠を捕る業が他の猫にぬきんでいたといひ、愛玩動物とはいへ、動物性を保つたままの唐猫を他の猫より拔群だとし、高く評価された事がわかる。

もう一つ注目したい言説は、「仍曰。汝含陰陽之氣備支𦉰之形。心有必寧知我乎。猫乃歎息舉首仰睨吾顔。似咽心盈臆口不能言」である。猫は話をかけられると、溜息をついて何かもの言いたげな様子で帝の顔を見上げるのである。⁽⁹⁾帝にとって猫は口をきかないものの、口に出して言うべき思いを持った一つの人格として描かれており、動物を擬人化する日本の動物観と、現在、ペットとして人間並みに愛されている猫の一面が早くも平安時代から現れたといえるだろう。⁽¹⁰⁾

宮廷の愛玩動物として大事にされる唐猫は『枕草子』⁽¹¹⁾（第七段）で「命婦のおとど」になり、ある意味で度が過ぎるほど人間並みに扱われている。なお、「猫は上のかぎり黒くて、腹いと白き」（第五〇段）とあり、「猫は背中だけが黒くて腹はとても白い」と、宮廷に相応しい猫の姿が描写されている。また、「なまめかしきもの」（第八五段）にも猫が挙げられており、「優雅で上品なもの」として描かれている。

最後に「簾の外、高欄にいとをかしげなる猫の、赤き首綱に白き礼つきて、はかりの緒、組の長きなどつけて、引きあるくも、をかしうなまめきたり」とある。

「いとをかしげな猫」が、「赤い首綱」に「白い札」付け、さらに、色に濃淡のある綱を長く引きつつ、歩きまわっ

ている。その様子が「をかしうなまめきたり」と、猫がその中に完全に溶け込み、宮廷の風景を彩る一つの要素として捉えられている。優雅な雰囲気醸し出す存在として位置付けられている唐猫が赤い首綱をしている姿から『源氏物語』『若菜』巻の黒猫が連想される。

(三) 女の身代わり「黒猫」

王朝ブランド品「唐猫」は『源氏物語』⁽¹²⁾「若菜上」「若菜下」の女三の宮と柏木の密通事件で新たな姿で現れる。

「若菜」巻は柏木と女三の宮の禁断の恋話である。六条院の蹴鞠の遊びの日、衛門督だった柏木は思慕してやまなかった女三の宮を偶然見ることになる。女三の宮が飼っていた小さい唐猫が大きい猫に追いかけられ、御簾の端から走り出た。その唐猫に付けていた綱により、御簾の端が引き開けられ、内部が丸見えになる。大勢の女房たちの中でもはつきり目立つ大澱の嫁である女三の宮の姿を目にした柏木は心を奪われてしまう。「猫のいたくなければ、見返りたまへる面もちもてなしなど、いとおいらかにて、若くうつくしの人やとふと見えたり」柏木は綱を解いてしまった唐猫を招き寄せ抱きあげ、如三宮の移り香りをかぐ。小さくて弱々しい鳴く唐猫はいとしくて若々しい、美しい女三宮とオーバーラップされる。

「若菜下」に至り、柏木は如三の宮に対する思いを慰めるために如三の宮の唐猫を手に入れ、夜も自分のそばに寝かせ、昼も猫の世話をし、大事にしていた。柏木にとって如三の宮への恋の道標である唐猫が、ここに至り、如三の宮の形代と認識されているのである。

猫の表象をめぐる日本と韓国の比較文化

「その中にも心賢きは、おのづから魂はべらむかし」

「恋ひわぶるひとのかたみと手ならせばなれよなんとてなく音なるらんこれも昔の契りにや」（やるせなくも自分の恋ひ慕うあの方の形見と思って飼いならしていると、おまえはまあ、どういふつもりでこうした鳴き方をするのだろうか。私の気持ちがよく分るだろうか）

このように猫を形代にした柏木の恋はここで止まらず、ついに密通事件を起こしてしまう。自分の罪に耐えられなかった柏木は死によってこの恋の破滅を迎える。

「若菜」巻に描かれている唐猫の表象について最も注目されているのは二人の密通の場所で柏木が見た「猫の夢」である。解説によると猫の夢は「如三宮の懷妊の予兆」とされているが、河添房江は夢の中、柏木が唐猫を宮に返そうとしたことはもう身代わりは必要ではない、念願の恋の成就したことを意味すると述べている。また、ここで唐猫は、娼婦の足もとにたたずむ黒猫のイメージで描かれており、黒い猫は、「悪魔や娼婦」の表象だと説いた。⁽¹³⁾

なお、神田洋は『日本霊異記』や『更級日記』の猫が「霊の形象」で現れたことを例とし、『源氏物語』の猫は「六条院の家霊の総体」として、柏木を破滅に導かせるのも唐猫であり、柏木に取り憑いた猫は憑き物の総体と考えられると述べている。⁽¹⁴⁾

つまり、唐猫は女三の宮の性的な要素を表し、柏木により高貴な女性の身代わりとして、官能的な存在として表象される。また、女三の宮を襲う六条御息所の怨霊の悪魔性とも照応し、「悪魔や娼婦」「霊」など「憑き物」として表象されているのである。

このように『源氏物語』の「若葉」巻における唐猫は上品で高貴なイメージから恋する女性として描かれたばかりではなく、魔性を持つ憑き物としての新しいイメージを創りあげ、王朝文学史の猫のイメージも大きく変換させた。

(四) 化け猫

化け猫というのは「人などに化ける猫また、その妖力を持つ猫。猫の妖怪」である。⁽¹⁵⁾ この化け猫は「恐怖の対象として猫」と「猫また」というイメージを経て江戸時代に登場する。

猫を恐怖の対象と描いた作品は「今昔、大藏ノ丞ヨリ冠り給ハテリ、藤原ノ清廉と云フ者有キ。大藏ノ大夫トナム云ヒシ。其レガ前世ニ鼠ニテヤ有ケム、極ク猫ニナム恐ケル」⁽¹⁶⁾ではじまる『今昔物語集』本朝世俗部、巻二十八「大藏大夫藤原清廉怖猫語第三十一」である。世間の人は酷く猫を怖がる主人公藤原に「猫恐ノ大夫」というあだ名をつけた。彼は山城・大和・伊賀の三国の領主だが、租税の米を全然納入しなかった。守は大藏大夫が猫を恐れるという弱点をつかみ、脅しをかけ、租税を納入させたという話である。ここで注目したいことは、大藏大夫は何故、猫を恐れたのかということだ。ここで猫は「灰毛斑ナル猫ノ長一尺余許ナルガ、眼ハ赤クテ、虎珀ヲ磨キ入タル様ニテ、大音ヲ放テ鳴ク。只同様ナル猫五ツ次キテ入ル。／…／其ノ時ニ五ツノ猫ノ鳴合タル音、耳ヲ響カス」⁽¹⁷⁾と描かれ、今までの宮廷猫とは異なる乱暴な姿を見せている。この猫の描写について、石崎等は「記述からみられるかぎり、おそらくまだ野性味の残っている日本猫ではないかと思われる」⁽¹⁸⁾と述べており、恐怖感を与える猫は唐猫ではなく、日本猫である、つまり、日本猫の存在の扱いは唐猫のそれと区別されていたといえる。

この野性味を持つ猫は藤原定家の『明月記』⁽¹⁹⁾で「猫また」になって現れる。天福元（一二三三）年八月二日「当

猫の表象をめぐる日本と韓国の比較文化

時南部云猫勝獸出来、一夜噉七八人、死者多。或又打殺件獸、目如猫、其体如犬長云々」と記録がある。また、『徒然草』⁽²⁰⁾（一二三二年頃）第八九段には「奥山に、猫またといふものありて、人を食ふなる」という世の噂が記している。

「猫また（猫又・猫股）」というのは「猫が年老いて尾が二つに分かれ、よく化けて人に害をするというもの」⁽²¹⁾であり、人に化け、妖力を持っている化け猫とは異なる。ここで現れた「猫また」の描写を見ると猫とは言えない姿である。目は猫のようであり、体は犬のようであって、夜に現れ、人を食い殺す。これはおそらく、はじめて遇った大型猫（豹、狐、狼）を身近な動物である猫の姿を借りて描写したのではないかと思われる。

なお、『徒然草』第八九段には「山ならねども、これらにも猫の経上りて、猫股に成りて、人とする事はあなるものを」と記されており、猫というものは長生きすると、猫またになり、人間をとることがあると、身近な家猫も猫またになれるという恐怖感を呼び起こしている。

このようなイメージの変遷を経て江戸時代には魔性（呪術性）を持つ恐怖感あふれる存在としての「化け猫」が登場した。しかし、歌舞伎や講談、狂言の「怪談物」で演じられた「化け猫」は、江戸時代の人々の暮らしの中で親しみを持っていた猫の新たな一面として捉えられ、恐れ忌み嫌う対象よりむしろ、「恐怖を楽しむ」ための道具として用いられた。

横山泰子は歌舞伎などで恐怖を楽しむことについて「日ごろ隠している野生の怖さを見せるところに猫の怪談の怖さがある。（中略）しかし、歌舞伎で演じられた猫の怪談は恐ろしいけど、深刻さに欠ける。歌舞伎は「役者を見せる」ことが前提の芝居なのだ。舞台にお化け物を出すのではなく、お化けが得意の役者を出すこと、役者の巧み

な芸を見せることが、歌舞伎怪談物の究極の目標なのである⁽²²⁾と述べている。歌舞伎が江戸時代庶民娯楽の中心的存在であったことから考えてみると、歌舞伎の中で現れた化け猫は当時の人々の猫のイメージに与えた影響は無視することはできないだろう。恐怖のイメージであった化け猫は、結局、人間を楽しませる娯楽の対象になり、また、その頃登場した「招き猫」のイメージと重なりあい、より一層、親近感のある存在として認識されたのであろう⁽²³⁾。

ちなみに、化け猫と関連して、関敬吾の『日本昔話大成』には「猫と嫁子」、「猫檀家」、「伊勢参りの猫」の猫の話が収められている。ここで猫は人間に恩返しするためもしくは人間の願いことを叶わせるために人間に化ける行動を見せた⁽²⁴⁾。このように、昔話に登場する猫は、すべてが人間に役に立つものとして描かれており、神秘な力を持つものとして現れている。結局、人間に変身する妖力がある化け猫は日本人にとって恐怖の対象ではない、娯楽の対象、可愛らしいペットというイメージにつながっている。

(五) 招き猫

「招き猫」というのは「座って片方の前足をあげ、人を招いている姿の猫の置物」として「財宝を招くというので商売の家で飾る⁽²⁵⁾」とされている。

この招き猫の発祥の由来については様々な説があるが、ここではもっとも古くて有名な伝説を紹介する⁽²⁶⁾。

安土桃山天正年（一五七三年～一五九一年）に発生したと思われる「豪徳寺で井伊直孝が猫に招かれる」という招き猫発祥伝説である。

猫の表象をめぐる日本と韓国の比較文化

ある日、荒れ寺の和尚が飼っていた白猫に向かって戯れに「お前も恩義を知るなら寺のためになることをしておくれ」と言い聞かせると、数日後、御供をつれた立派な風体の騎乗の武士が訪れる。「鷹狩りの帰りにこの寺の前を通りかかると、一匹の小猫がしきりに手招きするしぐさをして、不思議に思い、立ち寄ってみた」という。和尚は珍客の渡来にも慌てず、騒がず、茶を出して静かに法話などしていると、にわかに空がかき曇り激しい雷、そして激しい雨が叩きつけるように降りてきた。「雷雨を逃げられ、貴僧のありがたい話も聴けたのも何かの縁」と彦根藩主・井伊直孝はこの貧窮寺二多くの田畑を寄進し井伊家の菩提所とした。以来、豪徳寺は栄えるようになり、幸運を招いてくれた飼ひ猫に感謝した住職は、その死後ねんごろに弔って、供養のために猫塚を作った。⁽²⁷⁾

東京都世田谷区にある豪徳寺には、今も手をあげて誰かを呼ぶような姿をした猫の像がずらりと並んでいる。この招き猫は招福猫児（まねきねこ）と称して売り出し、人気稼家や花街の人たちにうけて広まった。

日本で招き猫が登場した理由を江戸時代の社会と照らし合わせながら考えてみよう。江戸時代は農業と養蚕業が発達した。しかし、米や養蚕に対する鼠からの被害も多かった。そのため、一般庶民も猫を飼ったが、猫を飼えなかった庶民は「鼠除け」絵を飾り、鼠から米や養蚕を守ってくれることを願った。そして、五穀豊穡と養蚕による増収が続き、商売繁盛に繋がり、それが鼠の被害から守ってくれた猫のおかげという発想が広く浸透し、招福縁起物として愛されるようになったのではないか。⁽²⁸⁾

このような呪術性を持つ猫のイメージは昔話にも表れる。招き猫そのものを素材にした話は見当たらないが、前述の「猫と嫁子」、「猫檀家」、「伊勢参りの猫」の昔話がそれである。⁽²⁹⁾ここで猫は願い事を叶わせてくれるものというイ

メージで現れ、なおかつ神秘的な力を持つ猫として神聖視されている。

以上のように、招き猫は前述した優雅で上品な宮廷の愛玩動物としてのイメージと異なり、人間の力で解決できないことを叶えてくれる、人間に備えてない力を持つ存在として表象された。その猫に、江戸時代には「鼠除け」として神秘的な力を持つ動物としての役割を与えたことをきっかけに人々は様々なことを願ったのであろう。鼠退治、商売繁盛、遊女の恋など、その願いの反映が招き猫を多様化させ、客や金を招き、恋を叶わせてくれる招き猫が登場する。つまり、人々の招き猫に対する願い事はその当時の庶民生活中の悩み、願い事と繋がるころがあろう。

以上、古典文献を中心に考察した日本の猫の表象は王朝文化と庶民文化、二つに分けることができる。

王朝文化では「唐猫」が王朝のブランド品になり、優雅で上品な愛玩動物としてのイメージが現れた。そして『源氏物語』『若菜』巻に登場した唐猫は今までの猫のイメージを大きく変換するきっかけになる。上品な愛玩動物が恋の媒介として、猫に自分が恋する女を投影させ、「猫Ⅱ女」という表象が生まれる一方、人を没落に導く「憑き物」として表象が生まれた。その表象は王室の没落とともに庶民文化に流れ込み、様々な姿で現れる。気品がある愛らしい猫の表象はおそらく現在ペットとして愛されている猫の姿であろう。

庶民文化では、鼠からの被害を防ぐために猫を飼っていたが、それができない場合は除け猫絵を貼ることで猫に神秘的なイメージを与えて崇めていた。そして、縁起ものとして招き猫を創り、猫の表象を利用し商業化した。一方、化け猫という魔性を持つ猫のイメージも登場するが、その恐怖感はその時代にともに娯楽の対象になり、現在、日本人の「猫観」形成に影響を与えたと考えられる。

二 韓国における猫の表象

韓国における猫に関する資料は日本に比べてはるかに乏しい。今回集められた資料が韓国における猫に関する文献のすべてとはいえないが、暫定的でありながら、集められた資料から韓国における猫の表象を考察していこう。

韓国における「고양이 (コヤンイ、猫)」という言葉の歴史は「고니 (コニ)」、「고이 (コイ)」、「괴 (ゲイ)」の段階を経ながら、後ろに「앙이 (アンイ)」がつけられたが、「고이 (コニ)」、「고이 (コイ)」、「괴 (ゲイ)」などと同じ発音の「高伊」や「鬼尼」、さらに「古伊」という漢字が宛てられた。⁽³⁰⁾

文献資料に「猫曰高伊」「猫曰鬼尼」という言葉が確認されるが、たとえば、『高麗史』(卷一百二十五、列傳 卷第三十八)に収録されている「姦臣(一) 柳清臣」に「柳清臣…不學無知。有機變。恃勢弄權。爲國害。時。有猫部曲人仕朝則國亡之讖。俗稱猫曰高伊⁽³¹⁾」と記されているように「猫」と「高伊」は同じ言葉であった事がわかる。

「姦臣(二) 柳清臣」の内容を簡単に紹介すると、高麗時代柳清臣という人がいたが、彼の家は代々に贱民集团である部曲を管理する官吏であった。その地域は「猫部曲」または「高伊部曲」と呼ばれていたが、柳清臣が高麗忠烈王の信任を得たことで彼の管理する「高伊部曲」が高興県(現在の高興郡)に昇格したとされる。「高伊」は「猫」の方言だったらしく、当時、この「猫部曲」の人が朝廷にいると国が減びるという「讖(不吉な予言)」もあった。⁽³²⁾「讖」と猫の関係については、今のところ断定はできないが、おそらく柳清臣が忠烈王死後、王位継承をめぐる権力闘争に敗れ姦臣とされたことと関係していると考えられる。

この内容を典拠として、一八世紀朝鮮時代の言語学者である黄胤錫の『頤齋遺稿』に収録された「華音方言字義解」にも猫は「高伊」と紹介されており、『夢嚙集』も同様に「高麗史云方言呼猫為高伊、今猶然但聲稍疾合爲一字（高麗史では猫を高伊と呼んでいる。今もそうだが音が合わせて一字となった）」というように「괴（ゲイ）」と発音が近い「高伊」という字が宛てられたと書かれている³³。

この「高伊」という言葉は、現在も韓国の済州島に「高伊岳」という地名として残っており、この地名の由来は猫背と似たところがあるからだとされている。

また、『한국문화상징사전（韓国文化象徵事典）³⁴』では「猫」という漢字を分析し、その意味を求めた。「猫」という字は「𤝵」＋「苗」の構成されており、「𤝵」は人間の善悪を判断する「神獸」であり、罪人と判断された人間には、攻撃させるという。「暗行御史（암행어사）³⁵」もこのような非行の納正権があるとして「𤝵史」という。それから、「苗」という字には「芽」や「小さい」、狩りの意味もある。すなわち、猫という字は「邪惡を食い殺す獵師」という意味を持つ。

このように、猫のことを「辟邪（邪氣を退ける）」と名付け、鼠をよく捕る猫は「泥棒を捕まえる捕卒（朝鮮時代の警察）」ともいい、穀物や果物、蚕などを守るために飼われた。

「泥棒を捕まえる捕卒」として「腐敗の剔抉」の表象的な意味を持っていた猫は、『中宗實錄』の「猫首座」³⁶という説話では「危害を加える權臣」に比喩されている。その内容を簡単に紹介すると、鼠も捕れないほど老いた猫が鼠を捕るために詐略を企んだ。猫は自分の耳の毛がないところを頭に被って「私は慈悲心を發揮して髪をそり、僧になった。これから仏様を仕えて一緒に精進していくのはどうか？」と鼠たちに言う。猫の姿を見てその話を信じた鼠たち

猫の表象をめぐる日本と韓国の比較文化

は老けた猫を首座に座らせ、その座を「猫首座」と名付け、法会を開いた。しかし、日々減らしていく鼠の数をあやしく思い、首座の猫を疑う一部の鼠とそれに反対する鼠たちが対立するなど、内紛が生じたりしたが、ついに、自分たちが老けた猫の企みに巻き込まれたことに気づくという記事が記録されてある。この記事は当時代を風刺したとされ、士林(사림)⁽³⁷⁾を鼠に喩えたことではないものの、金安老(김안로)⁽³⁸⁾を猫に比喩している可能性があるとされている。

甘言利説で鼠を誘い出し、一匹ずつ食い殺す古猫の狡猾さを人に危害を加える権臣に比喩された猫は、朝鮮における実学の集大成者である丁若鏞の詩「고양이(狸奴行)」(一八一〇)においても当時の貪欲で邪な官吏の姿として現実に對する鋭い風刺が述べられている。

南山村翁養狸奴／歳久妖兇學老狐／……／民被鼠割日憔悴／……／是以遣汝爲鼠帥／……／汝今一鼠不曾捕／……／顧乃自犯爲穿窬／……／聚其盜物重路汝／……／但喜群鼠爭奔趨／……／若鼠橫行寧嗾盧。⁽³⁹⁾

全四八句のこの詩は丁若鏞が配所で書いたものとして当時の貪官汚史を辛辣に批判する内容である。鼠(惡徳地方役人)を捕り老人(庶民)の被害をおさめるべき猫(監司)がむしろ鼠ができない狡猾な行動までやる。ひいては鼠に對する賄賂まで受け取り、結局は鼠と野合し、老人からの収奪は一層激しくなった。猫はもはや鼠を捕る天敵ではなく、鼠と一緒にあって、老人の暮らしをさらに苦しめる泥棒であり害獣でしなくなる。⁽⁴⁰⁾

丁若鏞の生きた朝鮮時代後期は、政府官僚の不正腐敗が蔓延していた。朝鮮時代の監司は各地方に派遣され、その

地方の民政、軍政、財政などを総括し、地方役人を指揮監督する役名があった。従って庶民に対する悪徳地方役人の横暴を取り締まることが重要な任務の一つであった。しかし、その役目を遂行せず、逆に悪徳地方役人と結託した監司の蛮行を人々は風刺の形で描いたが、それは、風刺とはいえ、書かれた内容を読めば具体的に誰のどのような行為が描かれているかが分かるような仕組みとなっていた。⁽⁴⁾

日本でも中国でも宮廷で愛玩動物を飼い、愛玩動物としての猫が流行った時があった。しかし、韓国の場合、宮廷で猫を飼ったという明確な資料はまだ見つからない。そこで、王の日常に現れた猫の逸話を紹介する。

江原道五臺山には大韓佛教曹溪宗の本寺で有名な月精寺が建てられている。その隣には新羅聖徳王三三（七二四）年に建てられた上院寺が位置しており、その寺の文殊殿の階段の横下に二つの「猫石象」がある。この猫石象には朝鮮時代の七代の王、世祖（一四五五～一四六八）の逸話が伝えられている。ある日、世祖が上院寺の仏殿に入ろうとしたとき、突然、現れた二匹の猫に裾を引っ張られ、入ることができなかった。このようなことが三回も続き、不思議に思った世祖はその理由を調べさせてみたら、仏殿の中に世祖の命を狙っていた刺客が隠れていたことがわかった。猫によって命を拾った世祖は猫の殺生の禁止を命じ、上院寺には猫石象を置かせ、その恩に報いたという。⁽⁵⁾

また、朝鮮時代一九代王、肅宗（一六七四～一七二〇）は猫を可愛がった王として知られている。肅宗は猫を金孫と呼び、食事をする時も隣に置かせ、肉をやったりした。肅宗が崩御すると金孫は何にも食べずに餓死した。この猫は儀のある猫だといひ、肅宗を葬ったところの隣に埋めてやったという。この猫は儒教の徳目である「忠」と「義」の模範になる動物として表象されている。⁽⁶⁾

以上からも分かるように、韓国の猫は日本とは異なる趣で現れた。つまり、多様な猫のイメージが共存している日

本とは違って、王に忠誠を尽くさない「姦臣」を、不正を働き、私欲を肥やすために庶民を苦しめた「貪官汚吏」を猫に喩え、当時の支配層を批判、または揶揄したものが多く見られる。

韓国は猫そのものへの関心よりも、もっぱら「道徳的価値」に照らして、「批判」や「揶揄」のための道具として猫が用いられる傾向が強い。もちろん猫が登場する物語の一部には日本に多くみられる多面的な要素が「痕跡」や「断片」としてわずかに残っていることも事実ではあるが、より持続的にみられる傾向は猫の特徴を「道徳的価値」の判断基準にされてしまったことである。そのため、画一的で教条的な猫のイメージが内面化され、今日まで続いているのではなからうか。

その理由として考えられるのが朝鮮時代の国教であった儒教（主に朱子学）の影響であろう。もちろん、猫が儒教の「忠」と「義」を代表する動物として表象された逸話もあるが、一般的に朝鮮時代に儒教徳目を教える際、よく喩えられた動物は「犬」である。一方、猫は恩を知らぬ動物として「犬」と正反対のイメージで語られたのである。今のところ暫定的ではあるが、儒教が韓国における猫のイメージ形成過程に影響を与えたことについては、今後さらに厳密な検証が必要であろう。

おわりに

本論が対象としたのは、日本と韓国における猫に対する表象の問題を読み解くことである。具体的には、古典文献に登場する猫に関する表象の異同・変化を明らかにすることと、そこに現われる両国の文化の一端の解明であった。

古典文献を中心に辿ってみた両国の猫の表象とその変遷は早い時期から大きな相違がみられた。日本の場合は王朝文化と庶民文化という二つの異なる視線で描かれ、王朝文化では上品な愛玩動物として、庶民文化では、猫また、化け猫という怪異のイメージと招き猫など、庶民の暮らしの中での身近な動物としてのイメージが共存して現れた。

韓国の場合には猫そのものへの関心よりも、道徳的価値に照らして、批判や揶揄のための道具として猫が用いられる傾向が強く現れた。

以上のように、両国の猫の表象を考察することで明らかになったのは、具体的な猫の仕草や行動に新しい意味を付与した日本と異なり、韓国では、猫そのものよりもあくまでも「くであるべき」猫の役割が前提とされたことであった。その前提を基準に人々は猫に対する期待を持つものの、その期待は猫の行動によって裏切られ、「裏切られた」という感情が、「猫＝憎らしい」というイメージを動かし難いものにしたと思われる。

このような両国の猫の表象は、日本の場合には、平安時代から形成されてきた猫のイメージをもとに江戸時代に、韓国の場合は朝鮮時代を背景として定着した。

日本の場合には、猫に対する畏怖や様々な表象が、江戸時代の流行神、ペットブーム、そして江戸時代に流行した歌舞伎に猫が登場することで、一般に広く猫の「人格化」と「神格化」が行われた。韓国の場合には儒教が国教であった朝鮮時代を背景に道徳的（儒教的）価値観に絶対的な基準を置き、猫の行動をも道徳的に判断し、または批判する対象を猫に見立てたことなどから猫に対する負のイメージが画一的に形成された側面があると思われる。

現在、韓国では、約一〇年前から猫をペットとして飼う人口が急増している。⁽⁴⁾それと関連して、韓国における猫のイメージがこれまでとは異なる身近な存在へと変わりつつある。このような変化はまだ仮説の域を越えないが、韓国

猫の表象をめぐる日本と韓国の比較文化

社会の中心的な価値観であった儒教的な考え方の崩壊の一面として捉えることも可能なのではなかろうか。

猫を含む動物観が今日の社会や文化の中で持つ意味を考察することと、動物に関するシンボルや表象などを伝え、書き残した人々の思考と、それらの人々が持つ動物観を知ることが、人間観や世界観を知ることにもつながるであろう。

註

- (1) 文学雑誌の「猫」特集には、『ユリイカ』一九七三年二月号。『国文学』「猫の文学博物館」学燈社、一九八二年九月号。『ユリイカ』「猫 この可愛らしくも不思議な隣人」二〇一〇年十一月号。これ以外の書物には、熊井明子『猫の文学散歩』朝日文庫、一九九五年。堀江珠喜『猫の比較文学』ミネルヴァ書房、一九九六年。などがある。
- (2) 白川静『字通』平凡社、一九九六年、一三四六頁参照。ちなみに、「子(ね)の日」とは、十二支の子に当たる日。特に正月の最初の子の日。
- (3) 中西裕「日本「猫」の文学史序説(一)——唐猫の頃まで」『日本文学誌要』第三七号、法政大学、一九八七年、七五―八七頁参照。
- (4) 「日本書異記 上巻第三〇」『新編日本古典文学全集一〇』小学館、一九九五年。原文、現代訳参照。
- (5) 註3同書。
- (6) 「王朝ブランド品」という言葉は河添房江「光る源氏が愛した王朝ブランド品」角川選書、二〇〇八年で使われた言葉。
- (7) 増補「史料大成」刊行会、『増補「史料大成」歴代宸記』臨川書店、一九六五年、九頁。
- (8) 河添房江、註6同書(二〇二―二〇五頁) および、宮崎莊平「王朝文学に猫を見た」『国文学—解釈と教材の研究』第二七巻一二号、学燈社、一九八二年、五三頁参照。
- (9) 原文は註7同書。および註6同書、五四頁参照。
- (10) このように人間並みで飼われている愛玩動物としての唐猫の話は、『小右記』(長保元(九九九)年九月十九日)にも記されている。一条天皇の猫好きは宮中で生まれた猫のために産養の儀式を行い、猫に五位の地位を与え、馬の命婦という乳母まで付けたという。

- (11) 「枕草子」『新編日本古典文学全集一八』小学館、一九九九年。順番で、三八頁、一〇九頁、一六八、一六九頁。原文と解釈参照。
- (12) 以下の原文・現代訳は「源氏物語」(若菜上) (若菜下)『新編日本古典文学全集二三』小学館、一九九五年参照。
- (13) 註6同書。
- (14) 神田洋「柏木と猫の夢」『物語研究』四号、物語研究、一九八三年、一〇九頁参照。
- (15) 小学館国語辞典編集部、『日本国語大辞典第二版』第一〇巻、小学館、二〇〇一年、一〇六一頁。二つ目の意味は「男をたぶらかす芸妓や娼婦」とされてある。
- (16) 「今昔物語集④」『新編日本古典文学全集三八』小学館、二〇〇二年。
- (17) 同右。
- (18) 石崎等「日本文学の中の「猫」」『国文学解釈と鑑賞』一九七九年六月号、至文堂、一九七九年、一一〇頁。
- (19) 稲村榮一「訓註明月記」第六卷、松江今井書店、二〇〇三年、一一三頁。
- (20) 西尾実・安良岡康作『新訂徒然草』岩波書店、二〇〇七年、一五五頁。
- (21) 註15同書、六六三頁。
- (22) 横山泰子『江戸歌舞伎の怪談と化け物』講談社、二〇〇八年、八三頁。
- (23) 同右、四〇九頁参照。
- (24) 関敬吾『日本昔話大成』角川書店、一九七九年参照。
- (25) 註15同書、第一二巻、四八九頁。
- (26) 宮崎良好は招き猫の由来が不明確であることが招き猫の信仰・神秘性を保つ秘訣ではないかと述べた。他の説としては「浅草の今戸焼招き猫」、「薄雲の愛猫説」、「金猫銀猫説」、「丸メ猫」の説がある。順番で、荒川千尋、「招き猫発祥伝説の東西」『招き猫の文化誌』日本招き猫倶楽部編、二〇〇一年、一二頁。および、宮崎良好「招き猫の文化誌」青弓社、一九八八年、九九、一〇二頁参照。小島環禮「招き猫の起源」二〇〇一年、七頁。ちなみに、招き猫の由来を中国からだともる説もある。中国の招き猫は長寿の意味を持ち、今はほぼ消滅した伝統文化だという。現在、中国の招き猫は日本から逆輸入されたとされている。河野貴美子「中国伝統芸術の猫と福を招く神」『招き猫の文化誌』日本招き猫倶楽部編、八二、一〇〇頁参照。
- (27) 荒川千尋、「招き猫発祥伝説の東西」『招き猫の文化誌』日本招き猫倶楽部編、二〇〇一年、一二頁。
- (28) 註26の宮崎良好の書参照。

猫の表象をめぐる日本と韓国の比較文化

(29) 註24同書。

(30) 李秉根「고양이 (猫) 의 語彙史」『어휘사 (語彙史)』대학사, 二〇〇四年, 一〇四―一三二頁参照。ちなみに、韓国では猫を呼ぶとき「나비 (ナビ)」とも呼ぶが、それは「猿」(語源は「남 (ナム)」との関連が指摘されていて註目に値する。김태곤『국어의 휘의 통시적 연구 (国語語彙の通史的研究)』소울, 박이정, 二〇〇八年参照。

(31) 「柳清臣」「高麗史」(卷一百二十五、列傳 卷第三十八)、国史編纂委員会「韓國史データベース」http://www.history.go.kr/url.jsp?ID=NIKH.DB-kr_125_0010_0130 (accessed 2010. 12. 03)。「高麗史」(卷五十七 志 卷第十一)「地理 二、全羅道、寶城郡」http://www.history.go.kr/url.jsp?ID=NIKH.DB-kr_057_0010_0020_0130_0010 (accessed 2010. 12. 03) にも同様の内容が記されている。

(32) 註30同書参照。

(33) 同右。

(34) 韓國文化象徵事典編纂委員會「한국문화상징사전 (韓國文化象徵事典)」東亜出版社, 一九九二年, 五七頁。

(35) 「暗行御史 (암행어사)」アムヘンオサ「朝鮮時代、王命を受け、地方を巡行しながら悪政を究明し、民政を見回した秘密監察職。

(36) 「中宗實錄」七七卷、中宗二九(一五三四)年七月二三日、四番日記事。「朝鮮王朝實錄情報化サイト」http://sillok.history.go.kr/inspection/inspection.jsp?mTree=0&id=wka_102&pid=wka_102 (accessed 2010. 12. 03) 参照。以下は原文。

「昔有老猫、(瓜牙)「爪牙」皆病、搏噬之才已盡、無計捕鼠。齟出耳内無毛之處、冒之於頭而行、呼唱曰：「我則今已發慈悲之心、削髮爲僧、安得與大象、共做精進之功乎」群鼠然猶畏服、莫敢出矣、及窺見髡頭之狀、大信其言而出應、推尊老猫、爲猫首座。首座居首、鼠輩以大小之次而立、爲法席之會。繞旋之際、細鼠之行、當首座之口。前行及佛後障蔽之處、輒攫吞之。以是徒象日縮、或疑首座之所爲、而信惑者、至於發怒、而言其不然。及其考視首座遺(矢)「矢」中、有鼠毛、然後知其陷於老猫術中。云。爲此說者、非以士林比鼠、但取其意而譏之。若以安老比猫、則不是無意、古亦有」。

(37) 士林(사림=サリム)は朝鮮時代に性理学を研究した學者文人たち。特に二六世紀、在野士類を背景とした政治勢力士林・士人・儒林。

(38) 金安老(김안로, 一四八一―一五三七)は朝鮮前期の權臣。權力乱用により弾劾され、流されたが、また起用された。その後も暴政を行い、文定王后の廢位を企んだが発覺され、再び流され賜死した。韓國學中央研究院「韓國歷代人物綜合情報システム」http://people.aks.ac.kr/front/tabCon/ppl/ppiViewaks?plid=PPL_6jOa_A1481_1_0002077 (accessed 2010. 12. 03) 参照。

- (39) 丁若鏞「狸奴行」『국역다산시문집(国訳茶山詩文集)』第五卷、民族文化推進委員会編、ソウル(在)民族文化推進委員会、一九八三年。から原文一部引用。
- (40) 윤승준「한중·우인의 동물 상징(韓中寓言の動物表徴)」『동방학지』一三七号、延世大学国学研究院、二〇〇七年、三〇一―三三三頁参照。
- (41) このように捕るべき鼠を捕らない猫の道理に外れた行動にたとえ、当時の社会を批判した文献は少し時代をさかのぼると崔演(二五〇三―一五四九)の「猫捕鼠説」『艮齋先生文集』第十一卷雜著にも現れる。「余乃嗟然歎曰。此猫受人育怠其職。何異法官不勤觸邪。強吏不勤扞敵哉」から猫がどう比喩されたのがわかる。「猫捕鼠説」では猫と鼠をやっつける豹柄の毛を持つ猫が登場する(則豎瞳迸金。文毛斑豹。磨牙張爪。晝巡夜伺)が、この猫はおそらく、猫ではなく、韓国を代表する動物とされている「虎」を意味するであろう。
- (42) 한상일「월정사(月精寺)」『대한불교진흥원』二〇〇九年、一五七頁参照。
- (43) 註34同書、五九頁参照。
- (44) 조희경「韓國伴侶動物の現状と実態」『대한수의사회지』四一巻一〇号、수의사회、二〇〇五年。

参考文献

- 伊藤重人他監修『朝鮮を知る事典』平凡社、一九八六年。
- 岡田章雄『日本人の生活文化史①犬と猫』毎日新聞社、一九八〇年。
- 奥野卓司・秋篠宮文仁編著『動物観と表象』岩波書店、二〇〇九年。
- 木村喜久弥「猫」その歴史、習性、人間との関係』法政大学出版局、一九八六年。
- グリッグズ、キャサリン・M、「猫のフォークロア」アンヘリング訳、誠文堂新光社、一九八三年。
- 塚本学『江戸時代人と動物』日本エディタースクール出版部、一九九五年。
- 中村禎里『日本人の動物観 変身譚の歴史』星雲社、二〇〇六年。
- 袋小路冬彦『1001匹のおかしな猫たち』国書刊行会、一九九三年。
- 横山泰子「化け猫、海を渡る」『浮世絵芸術』一五二号、国際浮世絵学会、二〇〇六年。
- 「妖怪を作り出す江戸時代人―手品本に見られる「妖怪手品」の系譜」『民族芸術』第二三巻、民族芸術学会、二〇〇六年。

猫の表象をめぐる日本と韓国の比較文化

김종대 『33가지 동물로 본 우리 문화상징체계 (33類動物から見たわが文化表徴体系)』 다른 세상, 二〇〇一年.
Robert Darnion 『고양이 대 학살 (猫の大虐殺)』 조한옥 訳, 문학과 지성사, 二〇〇八年。

A Comparative Cultural Study on the Symbol of Cats between Japan and Korea

PARK Yukyung

Master's Course, Major in Japanese Literature, Graduate School of International Japanese Studies Institute, Hosei University

Abstract

There is no other animal than cats which have a clear difference in image between Korea and Japan. When we turn to “classical literature” with the features of “oral literature” in mind, we will notice the widening gap between the two countries. In Japan, cats are described from two viewpoints, namely, court culture and popular culture. In the former, cats are taken as elegant pets. In the latter, however, they are supposed to be mysterious, described as the two-tail “nekomata” or the metamorphic cat on the one hand and they are familiar animals as symbolized in the beckoning cat on the other. But in Korea, cats are not taken as themselves, they are mainly utilized as icons to “criticize” or “ridicule” according to “mores.”

Through the comparison, it can be said that the difference in the image of cats between the two nations derives from the difference in religious and historical background. In Japan this image seems to have been fixed during the Edo Era, based on the history since the Heian Era. Korea, on the other hand, was in the background of the Joseon Dynasty Period. Particularly, in Japan, the “personification” and “deification” of deities developed through the “faddish gods”, the pet boom, and the Kabuki featuring cats during the Edo Era. In Korea, during the Joseon Dynasty when Confucianism was the formal religion, absolute significance was placed on “mores” (Confucian values). Therefore, the behavior of cats was also put to moral judgment, and cats were chosen as objects of criticism. This seems to have formed the negative image of cats.